

# 知覚の文化的デザイン

企画:	有元 典文	横浜国立大学
	岡部 大介	東京都市大学
話題提供:	西阪 仰	明治学院大学
	三嶋 博之	早稲田大学
指定討論:	青山 征彦	駿河台大学
	土倉 英志	首都大学東京

企画趣旨: 知覚の文化的デザイン

有元 典文 横浜国立大学教育人間科学部

心理学では、生活体が感覚受容器を通じて自己および外界の様子をとらえる働きを「知覚」と名付け、これまで研究の対象としてきた。目で見ること、舌で味わうこと、などの感覚受容器を用いたプロセスを切り詰めた概念が知覚である。知覚という概念の前提には、知覚対象としての実体の実在がある。つまり知覚ということばを使ったときから、知覚される外界や自己の状態が、知覚そのものの働きとは独立に実在することとなる。ゲーテの色の知覚に代表されるような実験現象学的な初期知覚研究は、知覚プロセスの外にある実体を感覚器官と中央神経系の活動がどう経験するかの研究であったと言える。一方印象形成や偏見、ステレオタイプなどの事態を対象とした社会的知覚(social perception)研究では、知覚システムを身体の外に拡張してとらえている。こうした社会的事態における行動の解釈は、生活体内部の知覚システムだけでは説明の出来ないことである。そうした知覚システムの説明の拡張はあったものの、しかし知覚可能な対象としての社会

的事態が、知覚そのものの働きとは独立に実在する\*点では、初期知覚研究と同じ構造を持つ(\*研究者がそう仕組んでいるのだから当然だが)。以上のように知覚は生活体の外部から内部への、意味・価値の引き込みとして理解されている。またそのことで、生活体の外の実在が保証され、また知覚する生活体自体(コギト)の実在も経験される。知覚と世界と私はもとの安定に収まり、つまり心理学における知覚研究は一周してふりだしにもどる。

だが安定は不安定が見えていないだけのこと。複数の生活体の間では、思い起こしてみれば知覚は衝突と調整の連続であった。知覚は身体的で安定してほんものようだ、と思えることのメカニズムを丁寧に精査してみたい。それには一定の文化的なデザインの仕組みが関わっているだろう。エスノメソドロジー、アフォーダンスの理論の領域を代表する話題提供者から、知覚の生成のプロセスを報告頂き、議論したい。

話題提供: 胎児を見る道具を介した視覚の達成  
西阪 仰 明治学院大学社会学部

この報告では、産科医療における医療専門家と妊婦との相互行為を扱う。とくに、日本の妊婦

健診では超音波診断装置が、非常に多く用いられる。超音波診断装置は、妊婦の体内を可視化

する装置であるが、超音波モニター画面の上に胎児の身体部位が見えるという事実が、どのようなプラクティス(やり方)を通して達成されているのかを、明らかにしていきたい。同時に、超音波モニター上に胎児の身体部位を見るということは、そこで行なわれている特定の行為、すなわち、胎児および子宮の発達の正常さを妊婦に実際に示すという行為に埋め込まれている。だから、胎児を見ることは、この「実際に示す」という行為の組織の一部として達成される。

報告者は、実際に、数十の妊婦健診をビデオに収録してきた。その収録された医療専門家と妊婦の相互行為のいくつかを書き起こし、おもに会話分析の視点より詳細に分析した。本報告では、その分析を実際に相互行為断片に即して具体的に示しながら、(1) 指差しと名指しによる、モニター上の陰影の構造化のプラクティスを

記述するとともに、(2) その構造化が「識別連鎖」と呼ぶべき行為連鎖の開始部を構成することを示し、(3) さらに、この識別連鎖が拡張されて、「正常さを実際に示すこと」という行為が組織される手続きを記述する。これにより、視覚が行為の組織のなかに本質的に埋め込まれたものであることを、明らかにしたい。

以上から、(1) 行為の形成が、本質的に複合感覚的な達成であること、とりわけ発話および視覚とならび、触覚が行為の形成に重要な役割を果たすこと、このことが明らかになる。また、(2) 超音波診断装置の使用は、胎児の知覚のための重心を妊婦の身体的経験から専門家の視覚的解釈へと移動させた。一方、相互行為参加者たち(医療専門家と妊婦)自身が、超音波検査における視覚情報の限界に志向していることも、示してみたい。

話題提供:アフォーダンス知覚とその公共性  
三嶋 博之 早稲田大学人間科学学術院

James J. Gibson(1904-1979)の生態心理学では、人間や動物の個体による「アフォーダンス」の直接的な知覚が主張されると同時に、その公共性ないしは社会性——すなわち、個体間での知覚の共有——も主張される。「アフォーダンス」とは人間や動物によって知覚される意味ないしは価値であるとされるが、これらが「個体によって」独自に知覚され、かつ「個体を超えて」同様に知覚されるというアイデアはいかにして成立しうるのか。

本報告では、まず、「感覚から知覚へ」という「2階建て」構造を前提とする伝統理論と、Gibson生態心理学における、「感覚と知覚の平行した存立」を認める「2戸建て」構造とでも呼べる理論について比較しつつ、相互の相違を明らかにし整理する。この際、いわゆる「不変項」(invariants)概念の特徴と重要性について確認し、強調する。続いて、伝統理論の中では統合されるべきサブ・カテゴリーとされてきた、「同一個体

内における他者」としての異質な感覚モダリティー間(視覚と聴覚、視覚と触覚等)での区別と重なりの問題について、当該領域における近年の研究動向を紹介し、意義づける。

Gibson 生態心理学において、いわゆる五感としての各「感覚モダリティー」は、解剖学的な構造の差異という観点ではなく、区別された「注意のモード」という観点から機能的に分類される。一方、「他者」は観察点が自身とは異なっているという点で、やはりある種の(第5番目に続く)「注意のモード」として、一般的な「感覚モダリティー」と並列に考えられるかもしれない。もしそうであるならば、前者と後者の違い——同一個体内での出来事か、個体をまたがった出来事か——にのみ焦点をあてるのではなく、それらの共通性を探ることが知覚のデザインについて、文化に開かれたものとして考えるために有用かもしれない。以上について、参加者とともに考えていきたい。